

SDGs と不労収入

プラスチックゴミと燃料

私たちの生活に欠かせないプラスチック。近年では、プラスチック容器が廃止され、紙製に変わるなど脱プラスチックの動きが加速しています。しかし、プラスチック製品の全てが悪いのでしょうか。ゴミを燃やす時、プラスチックは大事な役目を担っています。

石油でできているプラスチックゴミは、燃えるゴミと合わせると火力が増します。つまりプラスチック製品があることで燃料の経費削減になるのです。完全に分離して燃えるゴミを焼却した場合に燃料費がかかりすぎては本末転倒です。

当たり前のことですが、ポイ捨ての方がより深刻な

問題です。自治体によってプラスチック製品の処理方法は異なりますが、正しい分別がコスト削減に繋がります。「環境」と「コスパ」の両方を考えていく必要があります。

ゴミは捨てて終わりではありません。その後どのように処理されるのかまでを知ると、ゴミへの向き合い方も変わってきます。

第 29 ～ 32 号にわたり「SDGs と不労収入」をお届けしました。色んなテーマを取り上げましたが、私たちにできることは、知らないことに目を向け、自分で考えてみるということだと思います。



編集後記

編集委員 飯野文夫／八木橋祐香子／小林優作／高橋奏音

下野市と海のつながり、考えてみませんか？

編集委員の八木橋です。栃木は海なし県と言われますが、海とは切っても切れない深いつながりがあるって、知っていましたか？

私は宮城県の気仙沼生まれ、海の目の前で暮らし、海の恵みをいただいで育ちました。

少し気仙沼の紹介をさせてください。今から 50 年も前から気仙沼の漁師さん達は、湾に注ぐ川の上流の山に木を植える活動を行っています。「森は海の恋人」という素敵な合言葉もあります。山に降り注いだ雨は地中に伝わり、森林から河川を通じて海につながり、山の栄養分を海へと届けてくれます。山、森、海、このつながりがあってこそ海産物が育ち、私たちの食を支えてくれているのです。下野市の河川もたどっていくと、海へとつながっていますね。

それともうひとつ。川が海へとつながっていると言う事は、川から流れていったゴミも海へと運ばれてしまうということです。分解されないプラスチック容器、ビニール袋、ペットボトルなど…海岸には海外のラベルのものも増えてきました。帰省すると必ず浜辺を歩きますが、漂流ゴミがいつもあることに胸を痛めてしまいます。

10 年先、100 年先、豊かな海を守っていくために、より豊かな心でいられるように…

下野市でも、海とつながるプロジェクト活動なども行っているようです。下野市から、海を思い、「知る、調べる」という行動を始めてみましょう。



ご意見・ご感想をお寄せください

男女共同参画情報紙「シェアリング」をお読みいただきありがとうございました。今号の表紙は、SDGs の「s」を用いて、インパクトのあるデザインにしてみました。本情報紙は、2月と8月の年2回発行しています。より充実した情報紙を作成していくため、皆様からのご意見・ご感想を下記事務局までお聞かせください。9月末までにお送りいただいた方に粗品をプレゼントします。

発行・事務局

下野市総合政策部市民協働推進課

〒329-0492 下野市笹原 26 番地 ☎0285-32-8887 ☎0285-32-8606

✉shiminkyoudousuishin@city.shimotsuke.lg.jp

企画・編集

下野市男女共同参画情報紙編集委員会



下野市男女共同参画情報紙

シェアリング 第32号 2024.8

～わかちあい～



かんぴょう FOREVER

～下野市とかんぴょうの未来～

下野市のホームページから「シェアリング」
バックナンバーがご覧いただけます。



リモック
くらし
ウツツケ

タイトル由来 みんなが「わかちあう」大切さを持って、男女が協力しながら、男女共同参画社会をつくっていったらとの願いが込められています。



かんぴょうの状況

栃木県そして下野市のかんぴょう生産量が日本一であることは有名ですね。私（高橋）も小学生のときにかんぴょう農家へ社会科見学に行ったり、給食にかんぴょうが出てきたりしました。今回は下野市に生活する私たちにはなじみ深いかんぴょうから SDGs やジェンダー問題について考えてみます。

かんぴょうは江戸時代に栃木県に流入し、1978年に生産量のピークを迎えました。当時の作付け面積は **3.040ha**、生産量は **5.080t** です。しかし 1980年代から現在までは毎年減少が続き、2023年の作付け面積は **81.9ha**、生産量は **162.1t** でした。

参考：①食品新聞、2023.12.18 「かんぴょう生産量は微減で下げ止まりるか」(<https://shokuhin.net/89604/2023/12/18/kakou/kawaki/>)
②栃木県干瓢商業協同組合「かんぴょうの歴史」(<https://www.kanpyo.jp/history/>)



かんぴょうの危機！？ もしかんぴょうを食べられなくなる日が来たとしたら、その背景にはどんな問題があるのだろうか？



参考：③読売新聞オンライン、2023.7.11 「栃木県生産日本一のかんぴょうが生産の危機。農家高齢化人手不足、気候変動の影響も。5年で96トン減供給不足。行政に支援求める声も。」(<https://www.yomiuri.co.jp/local/tochigi/news/20230710-OYTNT50186/>)



農業とジェンダー

農業は、家族単位で営む家族経営が大半を占めています。そのため、農業に従事する（＝働く）女性たちは家事・育児・介護などの役割を担いながら農業にも参加する傾向があり、もっとも大変な場合には自分の休息・睡眠時間を減らしてまで役割をこなすことが研究によって明らかになっています。さらに繁忙期や緊急時には、月経や妊娠、出産の前後であっても農作業に参加しなければならないこともあり、出産時期をコントロールするという例もありました。近年では栃木県でも役割分担、経営方針や働きやすい就業環境を整えるため、「家族経営協定」を結ぶ農家も徐々に増えています。

また大学の農学部では男女比率が5：5であることが多く、宇都宮大学農学部でも同じ結果でした。しかし学部内の学科・専攻によっては男女比率が7：3と、偏りができることもあるようです。

最後に農作物を販売する人たちについても考えてみましょう。スーパーや直売所での店員さんは圧倒的に女性が多く、そのほとんどが正社員ではないパートやアルバイトです。これを非正規（ひせいき）雇用（こよう）と言いますが、給料も高くなく、雇用も不安定だという特徴があります。

未来を変える第一歩!!
アクションしよう!

合言葉は「男女共同参画」と「SDGs」

前ページでふれたようにかんぴょうの生産量は年々減少しており、その背景には様々な課題があります。これらの問題を放置したまま時が進めば、下野市のかんぴょうが未来へ継承されない可能性もあります。

次の世代により良い、輝かしい未来を残すために私たちは何ができるのでしょうか？この問題を考えたとき「**男女共同参画**」と「**SDGs**」という2つのキーワードが大切になってくるのではないのでしょうか。

「男女共同参画」

この情報紙の主題が「男女共同参画」です。男女共同参画をわかりやすい表現にすると、「男性も女性も個人として対等に尊重される」ことです。どうしても家のなかでの役割が多くなりがちな女性の負担を考え直すとともに、「みんな」が生きやすい社会のありかたを考える必要があります。

今日からできる意識改革

① 家事はみんなで分担する

家事は多くの場合、お母さんの仕事となる傾向にあります。しかし、本当にお母さんにしかできない仕事なのでしょうか。大変な仕事が誰か1人に集中しないように、ゴミ捨てや皿洗い、お風呂掃除など、できる仕事からみんなで分担することが大切です。

② 「男だから」「女だから」をやめる

性別によってこうあるべきという考え方の押し付けは個人を尊重することにはなりません。性別ではなく本当の自分と向き合って、自分らしく表現する（できる）ことが大切です。

&

「SDGs」

SDGs については第29号から本誌で取り上げています。地球に住み続け、良い環境を保つための2030年までに達成すべき目標です。しかし 2024年現在の達成状況は約16%です。今こそ目標を再確認し、自分でできる小さなことから見直しませんか？

誰でもできる身近な SDGs の一例

① 地元の食材を積極的に購入する

日本は他国と比べて食品の多くを輸入にたよっており、フードマイレージの指標が非常に高いです。CO₂ 削減のためにも、地元で生産された食材を購入し食べるという「地産地消」を意識しましょう。（フードマイレージ：食品の輸送によって排出された CO₂ の量）

② リユース、リサイクルをしよう

使わなくなったおもちゃや着なくなった服は、ほかの人から見たらお宝に変わるかもしれません。作り変えてもう一度使ったり、ほかの人にゆずってみたりして、本当に捨てなければならないのかをもう一度考えてみましょう。また、リサイクルできるものは分別してリサイクルしましょう。

③ 公共施設を利用しよう

猛暑続きの下野市の夏を乗り切るにはエアコンは必須！でも、少しでも CO₂ 排出を抑えたい。そんな時は図書館などの公共施設の利用がおすすめです。多くの人が同じ場所を共有することで一人当たりの CO₂ 消費量を減らすだけでなく、新たなコミュニティにかかわるきっかけにもなります。

SDGs や男女共同参画の問題は世界中の問題です。そのため地域や自分という小さな単位が問題の根本の部分にあることを見失いがちです。世界中の人、一人ひとりが意識し、自分の問題だと考え、変えようという意思をもって問題解決に取り組むことによって、大きな問題は実は小さな問題の集合体であると気付けるはずです。小さな問題なら皆さん一人ひとりの力でも解決できるはずです。

諦めずに向き合い続けることこそが未来を切り開く第一歩なのです。